

幸田弘子の舞台朗読

名作の世界を堪能する

第5回

宮沢賢治作『よだかの星』

樋口一葉作『にごりえ』

2008年

11月29日【土】

第6回

松尾芭蕉作『おくのほそ道』

音楽・宇野信夫

2009年

1月31日【土】



日本経済新聞の「何でもランキング」で朗読第一位に輝いた幸田弘子。昨年好評を博した樋口一葉シリーズに続き今年もジャンルの異なる名作の世界をお楽しみください。

◎かつしかシンフォニーヒルズ・アイリスホール

◎各回とも 14:00開場 14:30開演

◎入場料(全席自由) 一般 2,800円 会員 2,500円

第5回・第6回通し券 一般 5,000円 会員 4,500円

◎チケットのお取り扱い 前売開始 9月11日【木】

●かつしかシンフォニーヒルズ・チケットセンター 03-5670-2233

●かめありリリオホール・チケットセンター 03-5680-3333

●葛飾区文化施設指定管理者ホームページ <http://www.k-mil.gr.jp>

●電子チケットぴあ <http://pia.jp/t> 0570-02-9990 (オペレーター対応) ●e+(イープラス) <http://eplus.jp/>

主催：かつしかシンフォニーヒルズ 葛飾区文化施設指定管理者 後援：葛飾区 葛飾区教育委員会 協力：京成電鉄株式会社 JCN 葛飾

幸田弘子の舞台朗読

——名作の世界を堪能する——

幸田弘子プロフィール



東京生れ。NHK東京放送劇団に入り、放送・舞台で活躍。主演した三善晃作曲、音楽詩劇「オンディーヌ」は文部大臣賞、イタリア賞大賞を受賞。舞台で古典から現代文学作品までの朗読を続け、1977年から毎年「幸田弘子の会」を開催、樋口一葉を中心に、『源氏物語』や泉鏡花・森鷗外・夏目漱石・瀬戸内寂聴の作品など、古典から現代まで舞台上で朗読。舞台朗読という新しい分野を確立した功績に対し、81・82・84年と続けて芸術祭優秀賞受賞。さらに84年度芸術選奨文部大臣賞、95年毎日芸術賞、96年紫綬褒章、02年藤村記念歴程賞受賞。99年より『源氏物語』、『おくのほそ道』などによる「古典を読む」会の連続公演も開始している。01年から「源氏語り五十四帖」と題して『源氏物語』の原文を、彩の国さいたま芸術劇場（年6回・9年間）で読み始めている。03年秋の叙勲において旭日小綬章を受章。

第5回

2008年 11月29日【土】

宮沢賢治 作『よだかの星』

岩手県の質・古着商の家の長男として誕生した宮沢賢治（明治29～昭和8年）は、今でもたいへん人気のある作家ですが、生前に発表された作品はごくわずかで、死後になって多くの作品が刊行されています。

『よだかの星』も死後に発表された作品のひとつです。はちすずめやかかわせみの兄でありながら、醜さゆえに鳥の仲間から嫌われ、鷹からも改名を強要されるよだか。彼はついに生きることに絶望し、太陽や星にその願いを叶えてもらおうとしますが、相手にされません。夜空を飛び続けたよだかが最後に決意したことは――。

樋口一葉 作『にごりえ』

樋口一葉（明治5～29年）は「奇跡の14カ月」と言われる時期に、『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』などの名作を次々と発表した、明治を代表する女流作家で、幸田弘子がライフワークとして読み続けている作家でもあります。

『にごりえ』は、明治28年9月、23歳の時に発表した作品で、孟蘭盆会の頃、銘酒屋「菊の井」の一番看板であるお力を中心として物語は展開します。馴染みの源七と別れた後、お力には結城朝之介という新しい馴染みができたものの、内面の鬱屈は解消しません。何処にも逃げ場のない『にごりえ』の世界。それぞれの苦しい生きざまと悲哀は、聞く者に切々と迫ってくるようです。

第6回

2009年 1月31日【土】

松尾芭蕉 作『おくのほそ道』

『おくのほそ道』は、松尾芭蕉が元禄時代に著した紀行本で、日本の古典における紀行作品の代表的存在で、松尾芭蕉の著書の中でも最も有名な作品と言えます。

芭蕉が弟子の河合曾良を伴って、元禄2年3月27日に江戸深川の庵を出発し、全行程約600里（2400キロメートル）、日数約150日間中に東北・北陸を巡って元禄4年に江戸に帰ったときの紀行作品で、『おくのほそ道』では、旧暦8月21日頃大垣に到着するまでが書かれています。

◎かつしかシンフォニーヒルズ

〒124-0012 東京都葛飾区立石6丁目33番1号

- 電車：京成本線京成上野から約18分、または都営浅草線（京成線直通）日本橋から約20分、京成青砥駅下車徒歩5分、または京成立石駅下車徒歩7分
- 京成バス：JR新小岩駅⇔JR亀有駅（新小53）「文化会館」下車

